

平成29年度第1回都市科学部運営諮問会議議事録

日 時 平成29年7月24日(月)12時57分～14時21分

場 所 事務局本部棟 第2会議室

出 席 佐土原 聡 (主宰)、齊藤 麻人、早野 公敏、加藤 尊正、蛭名 喜代作、
笠原 政明、田村 隆弘、勝地 弘 (陪席)

議事に先立ち、佐土原学部長から挨拶があり、続いて、資料1-1にもとづき、学内委員および学外委員の紹介があった。

続いて、佐土原学部長より、資料1-2および1-3にもとづき、都市科学部運営諮問会議について説明があった。

続いて、佐土原学部長より、スライド資料にもとづき、都市科学部の概要説明があった。これについて、委員から、新学部になって新入生や倍率などに変化は見られるかとの質問があった。勝地弘入試・広報委員長から、都市科学部の目指している理念を意識している学生が入学している、倍率は留学生についてはやや低調だが、日本人学生については新しい学部ということもあり倍率が少し高くなっているとの回答があった。

また、委員から、高専編入の実施状況について質問があった。佐土原学部長から、建築学科では2年次編入がすでに始まっており、都市基盤学科では3年次編入から実施予定、他の2学科においては今後実施の予定はない旨、説明があった。

その他、6ターム制について、学生はこの制度を利用して長期の休みを作ることは容易にできるのか、との質問があった。これについて、佐土原学部長から、全学的には6ターム制を活用する方向性であるが、学科によってはカリキュラム上難しいところもあり、学生がどのように履修しているかを分析し、これからシミュレーションしていく旨、回答があった。

議 題

1. 評価の観点について

佐土原学部長より、資料2にもとづき、評価の観点について説明があった。今後、このような観点にもとづき、評価の指標となる資料を提供していくので、学外委員に評価をお願いしたい旨、依頼があった。

2. 都市科学部共通科目（基幹知科目）の拡充について

佐土原学部長より、資料3-1、3-2、3-3にもとづき、都市科学部共通科目（基幹知科目）について説明があった。

委員から、高校で文系のことしか学んでいない学生が理系の授業を取った場合の基礎的な知識の不足に対して、大学としてフォローするという姿勢で選択させようとしているのか、あるいは文系の学生は履修しないだろうと想定されているのか、との質問があった。これについて、佐土原学部長から、高校のときに文系（理系）中心に学んできた学生でも取れる科目をいくつか用意しているが、科目の中味を精査しながらきめ細かく指導していかなければならないと考えているとの回答があった。なお、委員から、おそらく2、3年

経過すれば先輩から情報が得られるだろうが、1期生についてはアドバイスが必要ではないか、との発言があった。これについて、齊藤副学部長から、秋学期オリエンテーションで履修の仕方についても指導していく旨、回答があった。

続いて、委員から、文理融合に対して教員はどのように変わろうとしているのか、との質問があった。佐土原学部長から、教員自身が文理融合していくのは難しい課題であるが、基幹知科目だけでなく関連科目についても融合的な科目を作り、それを多くの教員で担当しながら、教員自身が変わっていくことを促していきたい旨、回答があった。

なお、委員から、6月に開催された都市科学部開設記念シンポジウムに参加したが、こうした機会を頻繁に設けることで、自ずと教員も変わっていくし、そのなかで学生も素晴らしい感性を育まれていくのではないかと発言があった。これについて、佐土原学部長から、毎年こうしたシンポジウムを実施していく予定である旨、回答があった。

3. 都市科学部への期待・提言

都市科学部への期待・提言について、委員から次のような意見等があった。

- ・社会からの視点を学部の運営に取り入れ、社会のニーズによりそうという姿勢に大きな期待をしている。幅広い視点ですばらしい教授陣のもとで学んだことを、実際の社会のニーズに活かすという視点を学生にはもってほしい。

- ・都市科学部が実現しようとしていることは、まさに自分自身が経験してきたことなので、都市科学部の教員や学生が横断的な学びを実践するための材料、現場、テーマなどを提案していきたい。

- ・一時期、文理融合学部が多くの大学で立ち上がったが、それらとは一線を画して、横浜国立大学としての理念の下での文理融合を実現してほしい。教員の考えが切り替わらないために、途中で頓挫してしまった大学もある。ぜひ、日本で初めてということを何か実現してほしい。特に建築学科・都市基盤学科の学生が文系の学問を学ぶことは非常に意味があると思っている。

- ・地方創生の時代に都市というテーマにした学部を新設したことは素晴らしいと思う。地方創生が騒がれる裏側に都市の問題があり、その期待が大きいと思うので、ぜひ成功事例にしてほしい。

- ・新しい学部のあり方は哲学的であると感じている。よい社会を作るには、よく生きるにはというのは哲学のテーマであり、それに対して都市というものをターゲットにアプローチしようとする、自ずと理系だけでも文系だけでも文理融合だけでも足りない。まさにそれらが一緒になった学部ができあがったことは、学生たちにも夢を抱かせ、社会からも期待されている。ぜひ実践的なテーマをもって、実践的な学生が育つように尽力してほしい。